なつかしの三宮

明治初年の生田の馬場

明治、大正の三宮神社と境内の賑わい

荒尾親成

明治七年五月、神戸―大阪間に国鉄が開通した時、いち早く三ノ宮駅（いまの元町駅のところ）が設けられたことによっても生田神社の裔神（エイシン）（まごがみ）八社（一ノ宮―八ノ宮）のうちでは全国的に知られ、とりわけ神戸市民に最もお馴染みの深いお宮!!ご祭神の天照皇太神の御子湍津姫命（たきつひめのみこと）は、古来航海の安全と商工業の繁栄を守り給う神さまとして神戸にはうってつけの神さま。ここ中心に現在のセンター街も繁昌した感が深い。

筆者が神戸にきた明治四十年から大正末年までの記憶をたどっても、そのころの三宮神社境内は西の新開地と対抗する盛り場の感があった。

三宮神社への道すがらも楽しかった。私がいつも通って行く道は小野中道通りを通って滝道の広い踏切りを渡り、三宮本通りへはいると（現在センター街一丁目）先ず目につくのが阪本の洋食（現在錦のところ）、その山側に狐のよめ入りの大きな看板をあげた福井家具店（現在ユーハイムコンフェクト）、嬉しかったのは「製紙場（セイシバ）のぜんざいうまいよ」とよく食べに寄った小山ぜんざい（現イナハラ）。南手に大きな製紙場があったのでそう呼ばれた。

更に西へ行くと甘党の香月、その東側にアーチ形のトンネルがあって、その奥に東検（ヒガシケン）の芸者置屋があり、キレイどころが箱屋の男衆を連れて左褄で歩いているのに会ったし、大西の下駄屋、井上金物、長沢の文房具、大西呉服染屋などが商売を張っておられた。

生田筋を浜へ折れ、東側の山新うどん屋を見ながら煉瓦小路へはいると、いよいよ三宮神社の賑わいが伝わってくる。

境内には万国館（のち寄席になったこともある）世界館（のち御代廼座（ミヨノザ）、落語の寄席、また三宮キネマ）三宮倶楽部という活動小屋があり（何れも明治末年から大正元年に誕生）歌舞伎座（明治二十四年朝日座、同三十二年一月焼失、同年十二月改名再建）という芝居小屋、雑居亭という浪曲定席があっていずれも大繁昌していた。

殊にこの時代、お正月三ケ日の賑わいは、たいしたもので、爆竹を売る店（南京町から中国服を着た人が出張してきていた）ポッペン、竹ごま、のぞきからくり、見世物小屋も出て、いちばん子供の食欲をそそったのがサザエの壺焼き、プーンと鼻にくるとたまらなく食欲をそそり、これ喰べて「ナンテ、マがいいんでしょう」と流行歌に合せるシャレタ子供もいた。夏場の納涼のそぞろ歩きを当てこんだ境内の賑わいも盛んで植木市、氷店、アイスクリーム屋さん、足立袋物屋さんは歌舞伎座裏で、氷とアイスクリーム屋さんに早替りして、一晩の売り上げがなんと百円（いまの百万円）と噂され人々を驚かせた。

明治四十二年春、本殿北裏に三階建で出来た三宮勧商場（カンショウバ）（商品

陳列館）は、いまの百貨店の前身を思わせる雑居ビルさながらの商店街で、夏場には、ここの屋上で早くも大正初年にビヤガーデンを開いていた。星空を仰いで、屋根のない物干し場を思わせる階段を登ってゆくと、それでもアサヒビールの提灯が風にゆれ、涼しそうでビール、洋食、氷金時とナカナカ近代的な商売をしていた。

とくに印象に残っている想い出は、この勧商場の入口右手に瓦斯会社直営のカフェー「ガス」が大正二、三年の頃もう誕生したことで、五銭のコーヒを注文しても砂糖壺が各テーブルに出されていて、砂糖お好みによって入れ放題の豊楽振り、いたづらな子は、コーヒを半分飲み、また砂糖をたっぷり入れてコップ一杯マケマケにして飲んでいた。いつもキレイなウエートレスが白いエプロンをタスキにかけ、帳場のあたりからはその頃流行の松井須磨子のカチューシャの唄やゴンドラの唄、さては誰れかの蛮声に近い声で「お前とならばドコまでも、日光のケゴンの滝の中までもトコ、イトヤセン、カマヤセン!!」が蓄音機からフンダンに流れ興をそそった。この店は忽ち名物店になり、当時の神戸の文化人の巣のようなかたちになっていた。

筆者の子供のころ、三宮境内で印象に残っていることをあげると、活動小屋三宮倶楽部西のアンマキ屋の二銭のアンマキのうまかったこと、神社西入口のホーラクでギンナンと椎ノ実を煎ってアツアツのを売っていたオバサンのこと、大正四、五年のころ新聞社主催の活弁サン人気投票で、世界館の島津鷺城（ロジョウ）が新開地勢をおさえて最高得点で優勝したこと、三等入選、万国館秋山実弁（ミノル）士が前説の挨拶で首を横にお辞儀する癖があるので。。カニとアダ名されて人気があったこと、歌舞伎座で天勝の奇術桃中軒雲右衛門の浪花節、松浪義雄、和歌浦糸子（初代大江美智子養父母）の金色夜叉を見たり聞いたりしたこと。

お正月を迎えるに当っては社家の宮司さん（清水家）の家へ神宮大麻お礼を暮れの三十日に毎年貰いに行っていたこと、ここの先代のお母さん勢以（セイ）女史が日露開戦に当り金壱万円也（いま一億円の価値）を警察に持って行き、ポンと戦費にお使い下さいと投げ出し、天晴れ大和撫子振りを発揮!!ために本殿横に立派な石造顕彰碑（位置を替えて現存している）が建てられていたこと、古来三宮神社境内からコンコンと真清水が湧き、代々宮司さんが世襲で清水姓を名乗っておられること等、想い出は尽きるところを知らない。

戦後都市計画のため境内はひどく縮少されたが、この賑わいは今日のセンター街の賑わいにつながったような気がしてならない。

（郷土史家）

生田森とセンター街附近今昔

福田義文

汐なれし生田の森の桜花春の千鳥のなきてかよへる

秋成（あきなり）

平安朝から江戸期にかけての生田森から海岸に通ずる馬場先は、名作「雨月物語」の作家・上田秋成が詠んだような、まことに美しい田園風景で、民謡にも〝婆々ジャ、ババ（馬場）ジャト云ハンスケレド、生田ノババニハ花ガ咲ク〟などがある。

この附近が、市街地的な発展を遂げたのは神戸開港後で、しかも明治三十年以後。私が、大阪天満から生田宮に転勤した昭和十三年（阪神風水害）ころは、東門筋は古道具屋が多く、生田前筋から三宮神社附近は、色とりどりの商いの店と色街があった。建物も木造二階建てで、通行者も和服がほとんど。モダンガール・モダンボーイが出現したのもこの時代。その中、太平洋戦争の大きな渦の中に突入。遂に昭和二十年六月五日むなしい焼土と化した。

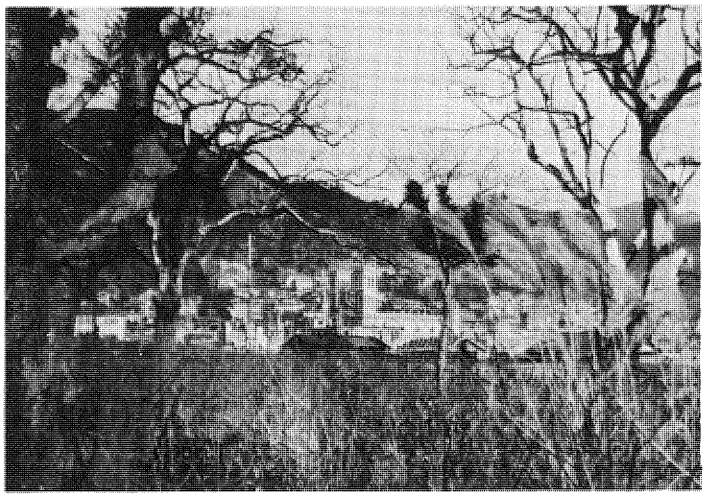
戦いの烈しき跡は残りけり焼き枯らしたる楠の大樹に

闌（たけし）

この歌は、言語学者・北里闌が、焼けただれた森に寄せられた、かなしい歌。

「焼土から立ちあがる」と、言う詞さながらに、枯死したと思った生田森も芽をふき出し、宮前のセンター街附近も、神戸市再建復興の先がけとなって繁栄した。今、このあたりは〝世界の衣・食が、ここに集る〟の観がある。私は、限りなき未来を夢みながら、来し方四十年余の激しかった歴史の悲しみと、喜びを回想している。

（生田神社宮司）



焼けてしまった生田森からは山手の教会がついそこに見えた（昭和21年早春）

生田の池は防火用水の役目を持っているが大空襲には間に合わなかった。

思い出のジャン市と柳筋界隈

春木一夫

ジャン市がいつ発生したのかよくわからない。しかし、戦後の三宮で、もっとも活気のあったのはジャン市と高架下とである。高架下には第三国人がたくさんいたが、ジャン市は純血の日本人ばかりであった。

何とかちゃんという美人のいるメシ屋があって、そこへ行けば、中西勝、貝原六一、鴨居玲君などの、絵は売れないが志の高い青年が焼酎を呑んで、盛んに気熄をあげていたのである。

昭和二十三年頃の柳筋。立っている人は早水ブリキ店のお母さん。

顔を見ると、十円、二十円とせびられたが、三十年たった今でもまだ返して貰えない。

ジャン市は全国的にも、有名だったらしい。哲学者の谷川徹三さんや作家の竹田敏彦さんがぜひ見たいというので、案内したこともある。竹田さんは小説に、少年刑務所から脱走してジャン市にかくまわれる少女のシーンを描き、映画にもなった。小説新潮にグラビアのルポルタージュを書き、腐敗し切ってどろーんとした空気とか、わい雑なムードとかの表現を使ったので、その記事が、この一角に住む人たちに、カチーンときた。

「肉体労働者に安くて栄養ある食物を提供しているわれらに対する侮辱だ」

組合長が交渉して、竹田さんから数十万円を出させた。

その金は便所の改装費に使われたそうだが、あのときの美人も、便所も今はない。雨が降るとぬかるんでいた道路は、果たしてセンター街のどの辺にあたるのだろうか。

☆　☆

柳筋もまた懐しい町だ。印象が暗いのは灯火が少なかったせいだろう。何しろ戦災に焼け残ったのはパウリスタと燐寸会館ぐらいで、他は今にも潰れそうなバラック小屋が、しめった黒い土にへばりついていただけなのだから。

しかし、復興の気運は見え始め、亡くなった芥川賞候補の作家中野繁雄さんが、

「うまいコーヒがあるぜ」

と、無理矢理に誘い出し、酒呑みの私を困らせたコーヒ屋も生れ出していた。

松岡寛一さんがモデルにしていた馬小屋のようなスタンドもあったし、武田繁太郎さんが「芦屋夫人」のモデルにしたとい

柳筋 三宮町三丁目 の概要

柳筋商店街は昭和四十四年四月五日、近代的なアーケードを完成、祝賀式典を行ったのを契機に『三宮センター街三丁目』として、センター街連合会に加盟した。

現在は『センター三三街』という愛称で呼ばれているが、これは昭和五十一年秋に、舗道を赤煉瓦に改修した時、一般から募集したもので、キャラクターも決まっている。

戦後もしばらくは三宮町三丁目の全域が一つの町会で、この通りは昭和二十二年頃までは道幅も三尺ぐらいの狭い路地で、十五、六軒ばかりの飲食店が焼跡のバラックで営業している程度の、ひっそりした裏通りに過ぎなかった。

その頃、隣保であるセンター街が発展のきざしを見せはじめたので、この通りでも何か手を打たねばと、まず町内会を作り全員が役員になって協議の結果、神戸市の許可をもらって道路の両側に柳の木二十本を植えて柳筋と命名した。それから町にちなんで柳荘とか柳旅館とか、柳という麻雀荘が誕生し、会員がコツコツと道路整備に励むなどの努力が実り、朝鮮動乱の影響もあってか外人バーがふえ、柳筋も漸く活気を呈してきた。初代会長藤和頼太郎

柳筋発展の功労者
藤和頼太郎氏

う女性が通うスタンドも流行っていた。鎌田の糸平さんが、焼け残った赤練瓦の上で焼いている鰻の匂いを嗅ぎながら、いつの日かこれを腹いっぱいたべてやろうと、けなげな決心をしたときもあった。

柳筋に柳が植えられたのは昭和二十三年頃だろうか。彫刻家の新谷秀雄さんと二人で、流して歩いたことがある。新谷さんがウクレレをひき、私が歌うのである。

本職の流しが眼を怒らせてきても、

「やあ、旦那方ですか」

顔見知りだったりして、ニヤリとされたのも今では懐しい。

ダンスホールの「ソシャル」で喧嘩が始まり、仲裁に入ったときなどは、気がついたら、ホールの床に伸びていた。あとで聞くと、多数の乱闘だったので、喧嘩相手と間違えられ椅子でなぐり倒されたのだそうだ。

こういう思い出は、今の三宮センター街の輝きからは伺うすべもない。

（作家）

▲昭和22年春。地球の上に朝が来る…で一世を風靡した川田晴久氏とトアロードを行く北森愛紹氏。

氏の功績に追うところが多い。その後、外人バーもへり、現在のような物品販売四分、飲食店関係六分の街並みになった。

三十年頃になって、柳筋は自ら卒先して都市計画を申請し、道路を一挙に六㍍の二倍の広さに拡張し、同時に下水、ガス、電気工事も相ついで整備、町並みは面目を一新した。

それを機会に東入口に最初に三三ビル(北森、矢野、真壁氏)が建ち、西に角丸ビルが、その後次々とビル化して現在に至るが、それでも三十五年頃まではまだ空地が目立っていた。

昭和四十年、十八年間会長を勤めた藤和氏が顧問になり、北森愛紹氏が会長に就任、近代化第二期へはいる。

その第一号事業としてアーケードの建設が決まったが、今は大きく育って長年親しんできた柳並木への郷愁が強く、切ることの賛否両論相半ばして仲々結論を見なかったのであるが、商店街近代化はそれを優先するとして、四十三年柳を切り総工費三千五百万円をかけて翌年四月竣工、センター街へ加盟。

翌年より宮本正三氏が会長に就任、五十年四月振興組合を結成して今日の盛業を勝ち得たのである。

〈柳筋商店街時代の会長、副会長〉

☆**藤和頼太郎氏**「スター時計店」　昭和23年～40年3月　会長

☆**押切博氏**「オリンピア」　昭和23年4月～33年3月　副会長

☆**矢野太郎氏**「ヤノスポーツ」　昭和33年～42年3月　副会長

☆**角丸時雄氏**「角丸印刷」　昭和40年4月～42年3月　副会長

▶三三ビル。昭和三十三年に東入口に出来た柳筋では第一号のビル

▲道幅を6㍍に拡張して工事を急ぐ（昭和31年頃）
右は道路，水道，下水，電気等の諸工事が完了してお祝いの会の記念写真（昭和32年）

三宮町の概要

▼明治6年11月　三宮町が誕生

三宮町は三宮神社があることにちなんで明治六年十一月命名された町で、出来てから百五年になる。

東は滝道、現在のフラワーロードから、西は鯉川筋まで、北は国鉄線路、南は元居留地までの区域で、現在神戸の中心地となっているが、当時は全くの寒村風景であった。

この辺りは旧神戸村の一角で、現在のトアロードは「三の宮筋」と呼ばれていた。周囲には田畑が広がっていて、近くに源平の戦いで討死した勇士「河原兄弟塚」が四、五本の松の根本に祀られているだけの西国街道筋に当たる。

三宮神社は大きな森であった。それが明治維新の神戸の開港の際に、この森をつぶして、その土で居留地の海岸をこしらえその南一面が居留地になったことから、にわかに賑わいを増していった。それでも明治十五年の記録によると戸数は百二十戸で四百人が住んでいたと記されている。

▼明治27年9月　三宮町一、二、三丁目に分れる

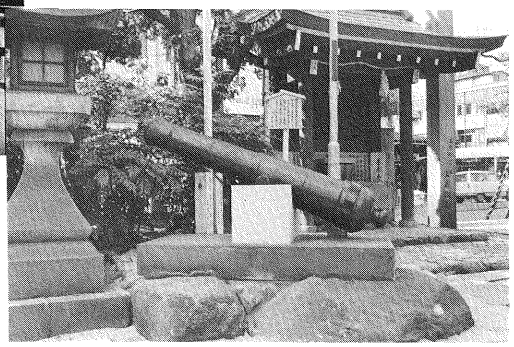
名もなき農村地帯であった三宮町も二十年余りたった二十七年頃には戸数が九百戸、人口三千五百余人になり、漸く町らしくなったので、この年、一丁目から三丁目まで区分けされた。

一丁目は滝道から生田筋の間、二丁目は生田筋からトアロードまで、三丁目はトアロードから鯉川筋までで、南北に通っている道路を挟んで区切られたので、一、二、三丁目の面積は必ずしも均等ではなく、一丁目が広い。

明治三十八年に阪神電車がそごうの山側まで乗入れてきてからは、東の客が三宮へ来易くなり、目に見えて発展していく。加えて明治四十三年四月には、神戸市街電車の本線が開通し、大正元年、滝道、加納町間が開通して、いよいよ本格的な三宮町の発展を招いたのである。

神戸事件の石碑

三宮神社の境内にある石碑と大砲は慶応四年一月十一日（明治元年）この前で起った大事件を記録している。この日三宮神社前を東進していた備前藩砲隊の前を外国人が横切ったことから無礼者め！と相なり大砲を打って戦った（但し死者は一人もなし）ことから、国際的大問題となった。幕府は責任者として備前藩滝善三郎に永福寺で切腹をさせ、事件は落着した。大砲はその時の同形のもので、後日和田岬から採掘されたものを、記念にここへ設置して往時を偲ぶよすがとした。現在は県政百年記念に設置された青銅プレートがある★★



三宮センター街の構成

三宮センター街は昭和二十一年秋に誕生した戦後の新興ショッピングセンターである。

「流行を創る街」として、常に時代の先端を行こうと、会員は一丸となって街づくりに励んできた。

三宮センター街商店連合会の構成は、加納町五丁目の一部を東入口として、三宮町一、二、三丁目を東西に貫く全長五四三メートル、その両側に並ぶ二二八店の小売商店によって成り立っている三丁連合の商店街で、各丁の組合員と店舗数、長さは左記の通りである。

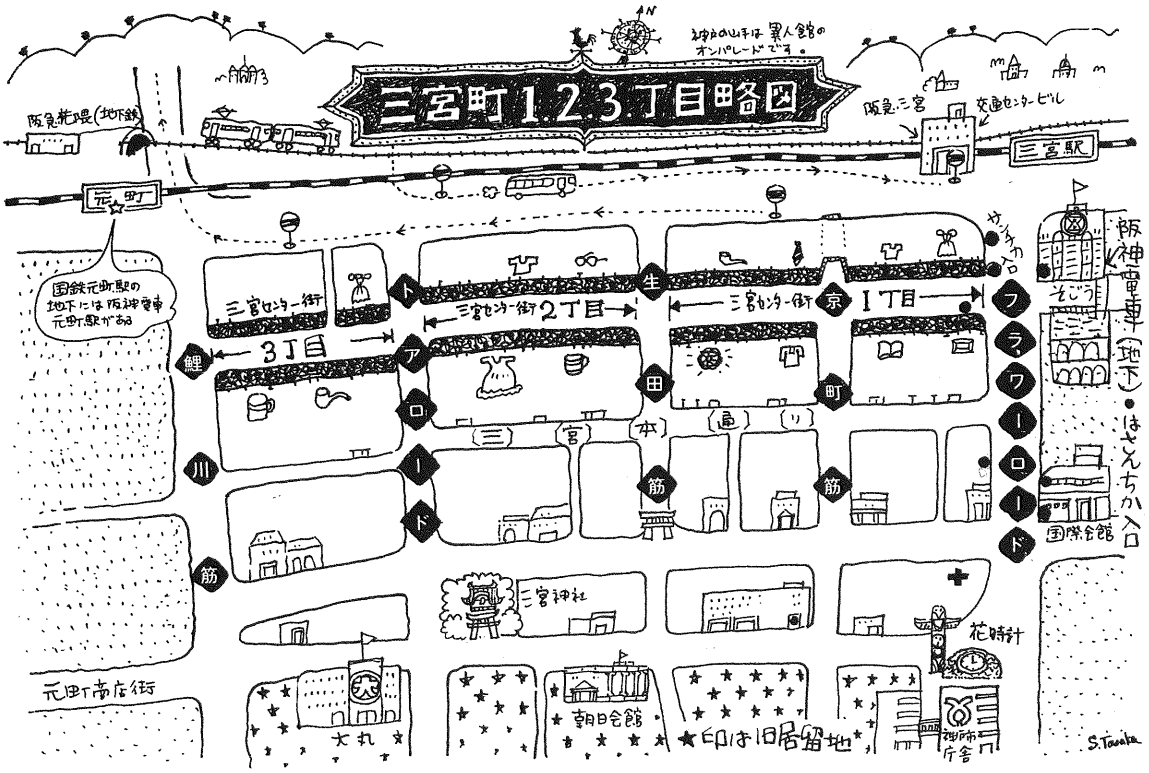
一丁目　九〇名　九二店　二六五メートル

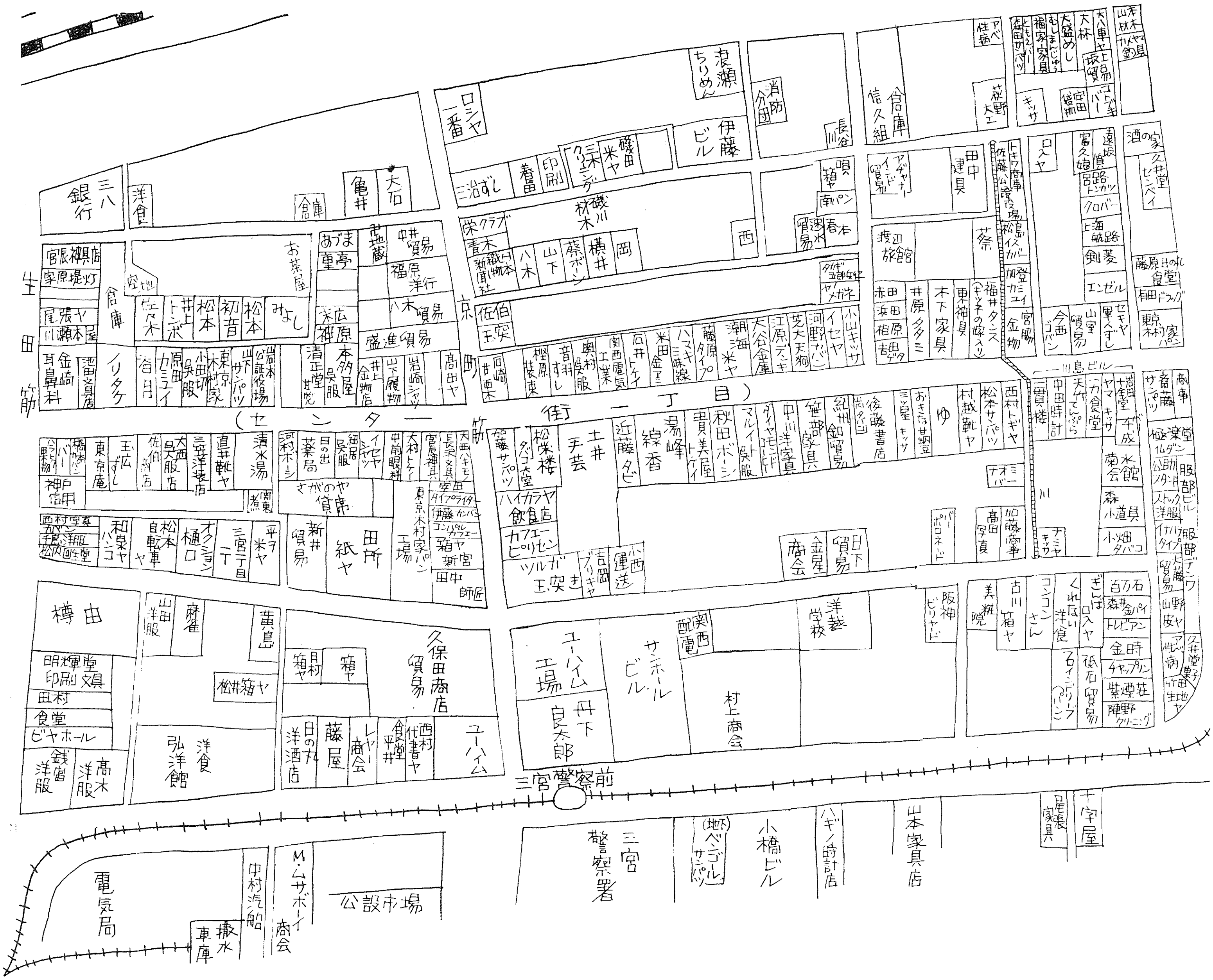
二丁目　六一名　六一店　一五三メートル

三丁目　七五名　七五店　一二五メートル

一丁目は昭和四十六年四月に、二丁目は四十八年二月に三宮センター街振興組合を結成した。三丁目は元「柳筋商店街」と称していたが、四十四年四月アーケード完成を契機に三宮センター街三丁目として加盟し、昭和五十年四月振興組合を結成。

神戸市は昭和四十一年三宮の近代化をめざして「三宮市街地改造事業」をスタートさせ、山側を市が担当、南側は「防災建築街区造成事業」として権利者がそれぞれビル化し現在に至っている。





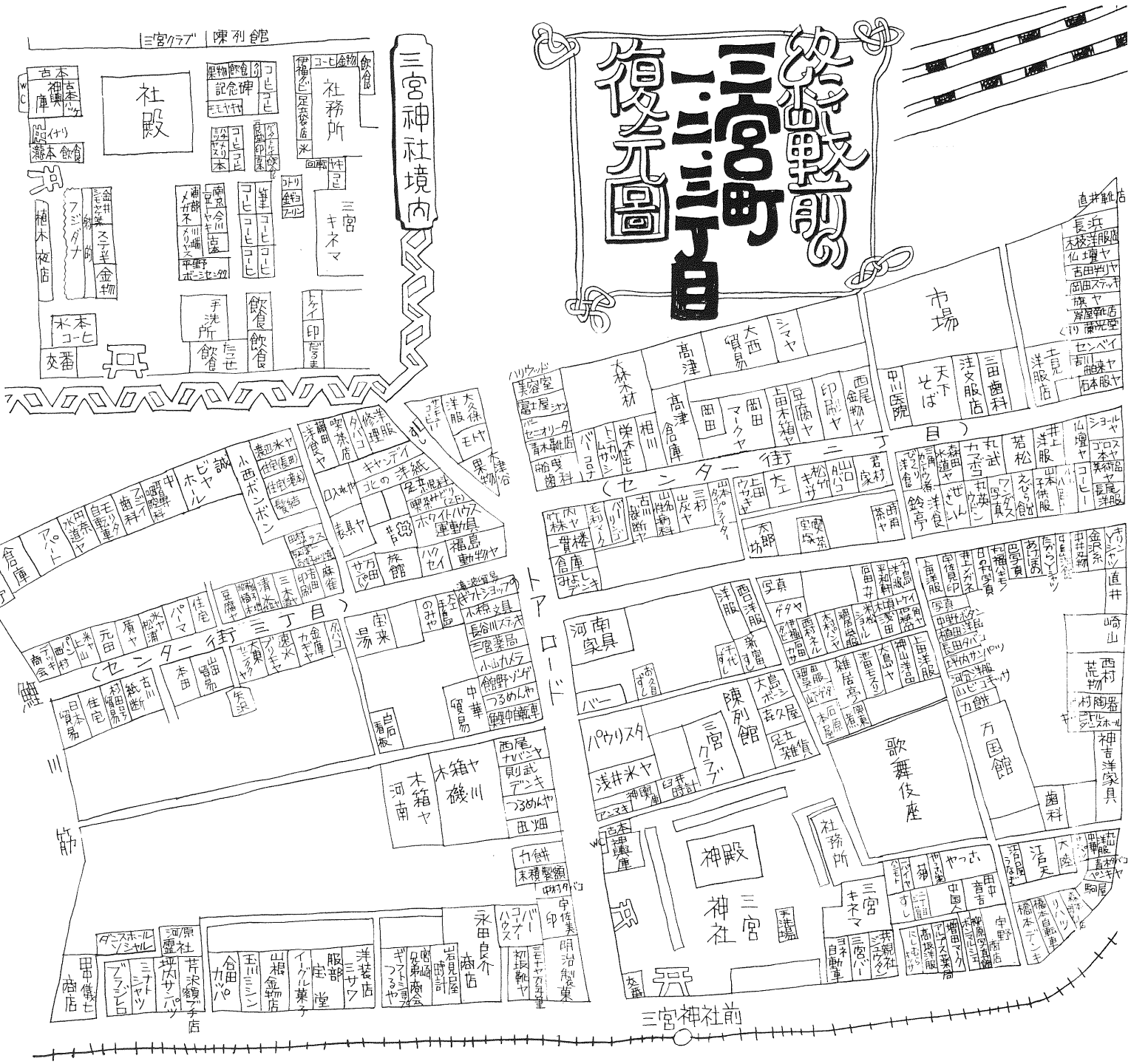
◈ 復元図作制にご協力下さった方々（敬称略）

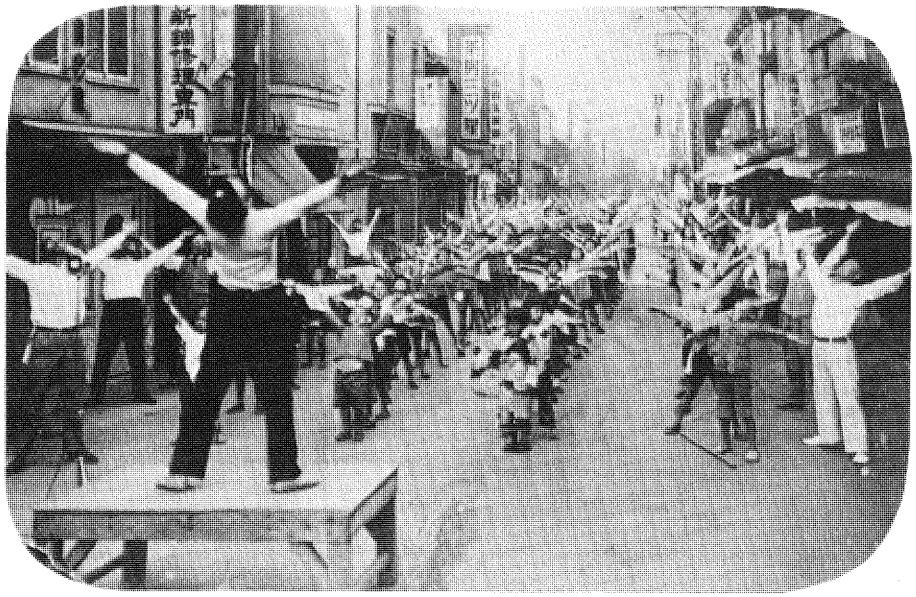
上田数平、井上貞夫、伊福良雄、岡本玉吉、川飛満祐、滝本義明、栗山浅子、小松原政雄、小西利幸、佐伯シゲ、坂本正三、斎藤通生、清水俊雄、柴本　実、田所新三、直井イサ、中本仁市、長沢堅次、永田良一郎、早水敬治、藤井吉昌、藤田信一、森川千以、山下良造、横井信市

上記以外の方にも色々ご協力頂きありがとうございました。お気付の点編集室へご連絡下さいませ。

〈復元図〉　永井文明　〈☎ 078－391－8515〉

© 不許複製・無断転載　月刊センター編集室 ◆S. 53. 7. 20 作成


終戦前の三宮町一丁目復元圖
三宮神社境内
三宮クラブ
陳列館
社殿
社務所
三宮キネマ
手洗所
飲食
市場
(センター街二丁目)
(センター街三丁目)
トアロード
河南家具
パウリスタ
三宮クラブ
陳列館
歌舞伎座
神殿
三宮神社
社務所
万国館
三宮神社前



▲ラジオ体操イチ、ニッ、サン！　商盛会の朝の体操は町中で盛大に行われた。キモノを着て手をふる女の子もいる（S.15）

▲S.51.10. 高架下の改装で戦後のビラが現われた。

▼戦後に初めて復活した生田祭りで（S.23.4）

▼せいもん払いのおいらん道中は新聞にも報道された。

しっぽりぬれたおいらん道中

六十翁が高尾太夫に

シャナリシャナリの宣傳行

ビルマ鉄道終戦来神

鈴蘭燈の出来た頃の２丁目西入口付近（S.23.秋）